



|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 17 - 19世紀フエの歴史変遷におけるティンハー港町とバオヴィン港町   |
| Author(s)   | ドー, バン, 福田, 康男, 西村, 昌也  |
| Citation    | 周縁の文化交渉学シリーズ7 『フエ地域の歴史と文化<br>周辺集落と外からの視点 』 : 75-84                              |
| Issue Date  | 2012-03-01  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/10112/6303">http://hdl.handle.net/10112/6303</a> |
| Rights      |   |
| Type        | Article   |
| Textversion |   |

# 17-19世紀フエの歴史変遷における タインハー港町とバオヴィン港町

ドー・バン

(福田康男・西村昌也 訳)

Thanh Hà and Bao Vinh Port Towns in Huế from the 17th to 19th Century

Đỗ Bang

(Translation by FUKUDA Yasuo and NISHIMURA Masanari)

16世紀以降、ベトナム中南部を拠点した広南阮氏はフエ地域に政治拠点を置くが、その外港として清河（タインハー）が発展を遂げる。そこには外国人が多く訪れ、貿易で大変賑わった。18世紀末になると中洲ができて港の機能が低下したため、より南の褒榮（バオヴィン）へと港が移った。褒榮港も引き続き外国貿易が盛んで19世紀末まで賑わっている。

キーワード：阮氏、清河（タインハー）、褒榮（バオヴィン）、外国貿易、産物

## 1. 歴史背景

17-18世紀のベトナムは鄭氏と阮氏の戦争期にあり、ベトナム北部（ダンゴアイ）とベトナム中南部（ダンチョン）に二分されていた。中南部に地盤をもつ阮氏は、すべての力を結集して独立国家を建てる気構えを持ち、北部鄭氏に対抗すべく土地開拓を行い、都市経済を発展させ、外国との関係を広げて、文化交流を行い、人材を採用した。このような中部の繁栄を背景として、フエ都城郊外の清河（<sup>タインハー</sup>Thanh Hà）港町は誕生し、発展した。

西山（<sup>タイソン</sup>Tây Sơn）朝期、多くの変化と戦争が起こり、外国侵略圧力が非常に高まったため、外国貿易活動は以前に比べて盛んでなくなる。しかし西山政権は、沱瀆（<sup>ダナン</sup>Đà Nẵng: 訳者注、中国名は岷港）、帰仁（<sup>クイニョン</sup>Quy Nhơn）、清河（<sup>タインハー</sup>Thanh Hà）で外国貿易商人に売買取引の優遇を与えた。

阮朝は国を統一したが、各皇帝はヨーロッパ諸国との関係に非常に臆病になり、忌み嫌い、次第に距離を置くようになった。明命帝以後は、西洋世界との通商窓口をダナンのみに限定した。重農抑商政策

が適用され、外国貿易は徐々に落ち込み、都市の発展は、王朝が主導的に投資したフェ都城の南東あるいは東に接する <sup>ドンバー</sup>Đông Ba (東巴)、<sup>ドンホイ</sup>Đông Hội (東会) の商業地区を除き困難となった。

## 2. 17-18世紀における清河の港町：広南阮氏期（1636-1774）

清河（タインハー）港町の誕生と発展は、同時に、商品経済の発展や広南阮氏のダンジョン（ベトナム中部）における割拠支配の発展と共にあった。

1636年金龍（<sup>キムロン</sup>Kim Long）に正堂（Dinh）を移してすぐに、阮福瀾（Nguyễn Phúc Lan）は清河の街（舗）の設立を許可している。都市としてのフェ市誕生の標となるこの重要な出来事は、地方に残された一枚の文書から確認される。その文書には、「上王が王府から離れて金龍へ戻った後、我々の要求どおり清河と地霊（<sup>ディアリン</sup>Địa Linh）の二つの社の境に大規模な市場を建設することを許可した」<sup>1)</sup>と書いてある。

明郷（<sup>ミンフオン</sup>Minh Hương；旧名は明香）村の保管資料のなかに、1658年（盛徳6年）阮福瀾（Nguyễn Phúc Tần）が「恩を施し、清河村と地霊村に属する屯営地に街をつくることを許可したが、それは1畝2高5尺4寸（訳者注：中部の一畝は4970m<sup>2</sup>に相当、つまり約6232m<sup>2</sup>にあたる）の広さである」<sup>2)</sup>とある。それがまさに最盛期にあった清河の街並み空間であった。

景治7（1669）年の耕簿<sup>3)</sup>には、「清河舗の土地は7畝5高8尺2寸になり、うち6畝3高3尺は、清河の地分に属し、残りの1畝2高5尺2寸は地霊の地分であった。その後、華商が商舗を建てるため4畝1高3尺2寸の地霊の川沿いの土地を購入した」とある。

この時代にアレクサンドロ・ド・ロード（Alexandre de Rhodes）が清河に滞留している。彼はそれを一つの街をみなした。その街は決してキムロン王府のように大きくないが、大きな街だとみなした。曰く「私は大きな街には住むつもりはない。その街はそれまでで最も大きな火事に見舞われたが、その街に近い小さな町に私は家を借りた」<sup>4)</sup>。この最盛期の清河街の大部分は華人商人の手中にあり、中国人町を意味する「大明客舗」と呼ばれた。

1685年華人商人は、華僑が祭祀を行う場所として、自分たちの最初の商売開始地に天后宮（Chùa Bà [婆寺]とも呼ばれる）を建設した。そこは清河の街の北側境界にあたる。商人たちは地霊の土地を買い、町を造成し、祈祷するために町の南端に関帝廟<sup>5)</sup>（Chùa Ông [爺寺]とも呼ばれる）を建設した。天

1) 保泰7年の嘱書「申官単」を指す。（訳者注：詳細はĐào Duy Anh, 1943, *Phò Lữ: Premiere colonie Chinoise du Thua Thiên*. *BAVH*30-3: 250-265. 陳荊和1959「承天明郷社與清河舗：順化華僑史之一頁」『新亞學報』4-1: 305-327頁. 参照、明郷史研究の概略は本紀要の西村論文参照）

2) 明郷社保管の景興14年文書「申官単」（訳者注：詳細はĐào Duy Anh, 前出、陳荊和, 前出, 参照）

3) Trần Kinh Hòa, *Làng Minh Hương và phố Thanh Hà thuộc tỉnh Thừa Thiên. Tập san Đại Học*, viện Đại học Huế, số 3, 1961, 102頁. 陳荊和、前出305-327頁

4) Nguyễn Văn Ngọc, 1992, Hình ảnh con người Quảng Trị qua sử liệu của các giáo sĩ ngoại quốc, *Cửa Việt* số 15, 84頁.

5) 関帝廟は西山朝期（1787年）の争いに勝ったことにより、地霊の管理下に置かれている。寺には関聖の像があり、広州、潮州、海南会館などが寄贈した扁額、乾隆45（1780）年に中国・隆盛炉で製造された鑄鉄製香炉（龍亭）などがあり、天后宮の龍亭と同時期のものである。

後宮と関帝廟はティンハー街の長期にわたった発展の痕跡であり、昔のティンハーの都市空間を確定する歴史的意味を持つ目印である。

17世紀の清河の街並みは、現在の<sup>ミン タイン</sup>Minh Thanh村の道路西側にあたり、川べりの方向に向いている、茅葺の家が立ち並ぶ一筋の通りにすぎなかった。華人商人は沼地を占有した後、河沿いに対して背をむける格好で一列の家々を建て、清河を通る道を主要通りとした。1700年華人商人は、火事を防ぐためレンガと瓦を使用して町を建設する許可を得た。町は、商店や輸出入代理店、主に中国商人のような外国商人や、季節風が吹くのを待つ間（10月末から3月まで）の商人たちに貸し出す借家から成り立っていた。以降、清河は街としての規格性と都市構造をもつに至った。

18世紀中葉、ピエール・ポワブレ（Pierre Poivre）が清河の売買取引状況を調査にきて、次のような考察をしている。「雨季に入ると各道路はぐちゃぐちゃとしてぬかるむが、唯一中国人の通りだけが広々とレンガ敷きである。道の両側には、しっかりした瓦屋でレンガ造りの家を建てている」<sup>6)</sup>。

20世紀初頭、モリノー（Morineau）が清河に来て調査している。彼は残存する町並みの痕跡から次のようにその町並みを再現している。「ベトナム人と混血した華人のいくつかの村、そのいくつかは川沿いに並んでいるが、それは杭上式の柱をもった茅葺屋根の掘立て小屋群である。他には、瓦屋根でレンガ造りの裕福な商店が、未舗装の道路や最後は田んぼに行きあたる長い通りの北側を占居している。その通り沿いには、明郷村成立時に建立された関帝廟から、清河の未舗装道路で現在の一桁橋のところまで、広範囲に各種建築物が建てられている。そこは高い所に古い未舗装道路があるが、各河川の流れが下の水田へ注ぎ込む」<sup>7)</sup>。

清河の街なみは、すでにレンガを敷かれて主要道路となっていた一交通軸上の単線道に沿って建設された。瓦葺きで壁をもつ家々が向き合う二つの通りは徐々に形成された。そうした街は、後方が田圃、前方は<sup>フオン</sup>Huong河の船着場であり、清河と地霊の二村の土地境界上にあった<sup>8)</sup>。

清河は、広南阮氏時代、大きな商業港となり、富春（フエ）-キムロン王府の最大の商業交易地であった。ティンハーは、アジアなら中国や日本、ヨーロッパならスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスをはじめとする外国商人をひきつける商業地となった。

清河は、フエ地域やダンジョンの生産品が集まるところで、また世界の海上交通路上にあり、さらに南北ベトナムの水利交通の中間点に位置する有利さをもつなかで、商業活動を行った。その世界市場経済における有利さと開放政策は、阮氏の商業を発展させた。

フエおよびダンジョンは、胡椒、ビンロウ樹、沈香、燕の巣、砂糖など外国商人が必要とする多くの貴重な産品をもっていた。ティンハーは外国との通商窓口であり、国が輸出入取引を独占していた場所

6) Cordier H, "Voyage de Pierre Poivre en Cochinchine, description de la Cochinchine" *Revue de l'Extreme-Orient*, tome 3, 1887.

7) Morineau, R. Souvenir historiques en aval de Bao Vinh (1). *BAVH* 6-4, 1919, p. 254.

8) Tại vườn nhà ông Huỳnh Quỳnh 氏の屋敷地では、方形井戸があり、昔の清河の商区を示すものとされていた。以前、この屋敷地では以前金が見つかり、銀細工の職人街があった根拠とされている。この付近では、土中から陶磁器やレンガ・瓦などが多く見つかっており、昔の商区の痕跡と考えられる（Đỗ Bang, *Phố cảng vùng Thuận Quảng thế kỷ XVII-XVIII*. NXB Thuận Hóa: 101頁）。

であった。ここではまた陶器、織物、銅鑄造品のような手工業品も行なわれていた。世界の武器取引が活発に行われたところが清河であり、鄭氏と阮氏の戦いが最も激烈だった時期（1627-1672）や、引き続いて武器原料や高級製品が、阮氏の宮殿や王府の官吏へ提供されていた時期に商取引が盛んであった。これはまた、オランダ、イギリス、フランスのような国際海洋商業強国が出現する時期でもある。そして、華人商人は、満州人が中国を占領し大満清国を樹立し、漢人を差別弾圧して周辺国へ移民の波を引き起こさせた時に、一斉にダンジョンに押し寄せた。その大量の移民の一部が清河に住み着き、商業地区をつくった。1685年以降、清国は再度、中国商船が取引を行う近隣諸国への出航を許可した。それによって清河港町の商業風景は一段と活発さを増し、天后宮や他の建築物がさらに多く建立された。

毎年広南国は、<sup>ドンナイ</sup>Đông Nai や <sup>ザーディン</sup>Gia Định（嘉定：サイゴン周辺域）から米を運搬させて富春（フェ）王宮やフェ人民に供給するため数百隻の船を徴用した。これについては次の歌が有名である。

米が尽きればドンナイから運び、

薪が尽きればタンサイ（*Tân Sài*）<sup>9)</sup> から運ぶ

会安（<sup>ホイアン</sup>Hội An）にはたくさんの西洋の民用製品があり、華人商人はそこから手に入れて清河で売った。黎貴惇は次のように書き記している。「広南（<sup>クワンナム</sup>Quảng Nam）の会安ではヨーロッパ船が銅釜、銅大盤を運びいれ、（清河で）数万個売りさばっている。中国商人はさらにそれを清河で売って倍の利益を得ている」<sup>10)</sup>。

ベトナムが二分されていた時期、黎貴惇は、清華（<sup>タインホア</sup>Thanh Hóa）や父安（<sup>ゲアアン</sup>Nghê An）、山南（<sup>ソンナム</sup>Son Nam：現ナムディン、フンイエン、ハーナム、ニンビン各省）の商人が海路で商品を清河へ運び、交換していたことを書き示している。タインホアやラオスの商品は陸路で甘露（<sup>カムロ</sup>Cam Lộ）の定期市へ運びこまれ、さらに商人によって清河に運ばれて売られた。

そうした状況から、阮福潤（*Nguyễn Phúc Khoát*）の御用医者であったドイツ人医師のジョン・コフレ（*Jean Koffler*）が次の考察をしている。「ベトナムの北部と南部の各省の間での交換は商業に重要性を加えている。商品は陸路と海路で京都（フェ）に集まり、そこで販売されるか、またそこから別の場所を持ってゆかれる」<sup>11)</sup>。

主要な輸入品は、日本や中国から運ばれた銅製品、鉛、合金のような金属製品を含む広南国へ供給される商品であった。たったの二年間にマカオの船は清河に15万キログラムの亜鉛入りの合金を運び、お金を鑄造した。日本の質のよい赤銅は100キロの価格にすると45貫銭になった。上海、福建、広東の船が運んでくる赤銅は購入価格を申告しなければならなかった。そして、それらを（広南）国が購入したあと、はじめて他所に売るために船に売ることができた<sup>12)</sup>。ポルトガル、オランダ、日本から購入した武器は鄭氏との戦争に使われた。阮福瀨（*Nguyễn Phúc Tần*）は、一度マルキ（*Maruqe*）宣教師に1000ネン（訳者注：<sup>ネン</sup>*nén* はベトナムの重量単位。1ネンは375g）の銀を渡しマカオで武器を購入させた。1659年初

9) ドンナイは、現ホーチミン市の東隣地域。タンサイは今のクワンチ（*Quảng Trị*）にあたる。

10) 黎貴惇『撫邊雜録』：引用は翻訳版 *Lê Quý Đôn, Phủ biên tạp lục*, NXB Khoa học, Hà Nội, 1964, 358頁。

11) *Koffler J, Description historique de la Cochinchine*, translation by Barbier, *Revue Indochinoise*, 1911, p. 585.

12) 黎貴惇『撫邊雜録』：引用は、前出翻訳版 241-242頁。



頭、マカオの船が銃弾薬を運んでやってきた。王はあまりに喜び、急いで軍兵とともにティンハー港に出迎えに行った。王は歓迎のあいさつとして銃を3発打ち鳴らすよう命じる。王は落ち着かずに大砲の口をなでたりしながら、まるで阮氏が鄭氏の軍隊を灰燼にして絶滅させたごとく、その様子は一種満足げにみえた<sup>13)</sup>。

ピエール・ポワブル (Pierre Poivre) はつぎのように知らせている。オランダ人と別のヨーロッパの船は多くの珍しい玉石を、イギリス人は羊毛と革による各製品を清河に持ってやってきた。中国人は絹、錦、羊毛、革、陶磁器、紙、絵、竹、茶などの高級製品や、または沙隴 (Indomitus)、木香、黄連 (Coptis Chinensis)、朝鮮人参などの各種薬料をもってやってきた。

18世紀中葉の清河港町のにぎやかな取引風景は、ジョン・コフラー (Jean Koffler) によって記録されている。「毎年約80隻の中国商船が各省からティンハーにやってきており、ここの経済が繁栄している証である」<sup>14)</sup>。

輸出商品について黎貴惇は、(王府管轄)の庫には、輸出される金、沈香、燕の巣、象牙、海亀、氷砂糖、ざらめ糖、緑豆、魚醬、塩、白布、ゴザ、紙、犀角、黒檀、旗、銅鐘等があることを記し、明靈 (Minh Linh: 現クワンチ省) 縣特産の胡椒のようなダンチョン (中部) の貴重な産品も収蔵されていることを記している<sup>15)</sup>。また、「毎年5月上旬になると、(国は) 最も新しい船で隊長と精兵ともに地方へ行くよう指令する。(彼らは地方民の) 胡椒畑の多寡に応じて割り当て分や購入定価を(地方民と) 話しあって決め、(国は) 一担ぎ分の胡椒に対し清河港まで運んで中国人へ売ると5貫銭を支払うが、勝手に地元民へ売ってはならないことを命じている。そのほかに、地方民は白胡椒と黒胡椒をそれぞれ一袋(袋: 62.5kg) づつ貢納するという法令があった」<sup>16)</sup>とも記している。

#### 黎朝鄭氏期と西山朝期 (1775-1801)

鄭氏軍団がフエを占拠していた時期 (1775-1786年)、富春 (フエ) はもはや城塞都市ではなく、清河 (ティンハー) もダンチョンの商業中心の役割を果たさなくなっていた。そのため清河の取引状況は衰弱し、すべての経済活動は困難に遭遇し、ここで起きる係争事項は解決できなくなり、惨憺たる状況にあった。

西山 (Tây Sơn) 朝期 (1786-1801年)、富春は新指導体制の中心地であり、ダンチョン (中南部) - ダンゴアイ (北部) の分裂が終焉したのち首都となった。西山の光中 (Quang Trung) 帝が進めた清国やヨーロッパ (ポルトガル、イギリス) との外商拡大政策とともに、そうした有利さが、清河を回復させ、新たな段階へと突入させた。ところが、自然環境の変動はティンハー港の前方、フオン河の中間に中州を出現させた。そのため船が港に接岸しにくくなり、フエにやって来る商船は別の港に入港するようになったため分散し、清河の商人は徐々に減少した。

13) Chappouille H. *Aux origines d'une Église*, Rome et les Missions d'Indochine au XVII<sup>e</sup> siècle, 1943, Paris, p.173.

14) Koffler J. *ibid*, p. 585

15) 引用は『撫邊雜録』、これはĐào Duy Anh前掲, 258頁の議論にもあり.

16) 引用は『撫邊雜録』翻訳版、前掲書, 354頁.

地方文書によれば、1658年に拡大した清河舗は、阮福瀨 (Nguyễn Phúc Tần) から地霊 (ディアリン) 社の土地を与えられて関公廟 (爺寺) を建立した。そのため1787年阮惠 (Nguyễn Huệ) 王の北部平定時期に、地霊の住民はその土地の返還を求めて告訴状を送った。地霊はディアリン村の人民へ土地を返却することで解決させた<sup>17)</sup>。この訴訟結果は正しく公平な解決方法ではあったが、これは清河の華人商人勢力が弱体化した時期を如実に示している。

西山朝期の (明香社の) 清河舗の行政管理機構は舗長が率い、その舗長は通事員により兼務され、売買取引を管理した。また明香 (Mình Hương) 社の郷長は該簿槽 (Cai bộ tàu) により兼務され行政と民事を管理した。華僑は、総 (Tổng) や縣 (Huyện) という行政単位レベルによる管理を受け入れていなかった。

清河の華人商人は西山朝から、人頭税、兵役、市場税の免除や市場税徴収権の取得など、多くの特恵を享受した。彼らは国の役職に就くことができ、また王朝主催の大宴会に参加して、対聯を書いたり、祭りのときには飾りつけなどをした。政権の恩恵に應えるため、清河の華人は朝廷に対し、元旦や端午などの各節句、あるいは国王誕生日、歴代国王の法事のさいには礼物を貢納する義務を果さなければならなかった。礼物は銀や玉、銅、布などの高価な産物であった<sup>18)</sup>。

清河港の前方のフォン河に現れた中州のため、西山朝期後半は清河の商人が徐々にジン (營) 市場 (Chợ Dinh)<sup>19)</sup> や褒榮 (Bao Vinh) へと移動した。Đào Duy Anh 教授の研究によると、1789 (光中 2) 年に明香村の内籍民は792名、しかし1795 (景盛 4) 年になると50-60名に減少している<sup>20)</sup>。しかしながら行政組織面では、西山朝期 (1786-1801) の清河舗は、「明香社清河舗」という呼称を持つ独立行政単位として分離し、広南国阮氏時代のようにホイアンに直属することはなくなった<sup>21)</sup>。阮朝初期にはタインハーの華僑がジン市場へ移動することにより、「清河とジン市場、第二が明郷社舗 (Thanh Hà-chợ Dinh nhì phố Minh Hương xã)」<sup>22)</sup> と言われるようになる。富春の商業中心としての清河港町が衰退し、そのなかで褒榮への移行が進んだ。

### 3. 19世紀阮朝期のバオヴァイン港町

清河港前方のフォン河の中間に出来た中州 (Côn Bút: 訳者注 bút は筆の意) の出現は、直接地理条件を変えさせ、フェ (富春) 政治中心地の脇に賑わいをみせていた商業区の膝を折らせ、褒榮がその機会を捉えて商人を集め19世紀のフェ地域における大きな商業区となる。

褒榮は、いくつかの有利な要素をもつ。都市に近く、河川に近く、道路に近く、城都に近く、清河にも近いため、商業へ転換して発展を確実なものとしていった。そのうち最も有効だった要素とは、船が

17) Đỗ Bang, 前掲書, 99頁。(詳細は陳荆和、前出論文参照)。

18) Đào Duy Anh, 前掲, 257頁。

19) 訳者注: フェ都城東接する商区で、華人住民の会館が集中。

20) Đào Duy Anh, 前掲, 262頁。

21) Trần Kinh Hòa, 前掲, 108頁。

22) Đỗ Bang, 前掲書 96頁。

接岸しやすい深港をもっていたことである。

「褒栄の岸高く、底深し

*Bao Vinh cao bực, hãm bờ*

船が離れば、母は子供との縁に頼る

*Ghe mành lui tới, mẹ nhờ duyên con*]

華人商人は褒栄社の前面にあたる土地を買い、新商業地区を貫く大通りに対し対面する二つの通りからなる町をつくった。村の前面はフォン河と港の船着き場であり、後方は村の住宅地と田畑にあたる。

褒栄が、清河やジン（Dinh）市場、ベトナムの華人のほかの商業中心地と異なっているところは、褒栄には華人の共同信仰施設がないことである。褒栄街は北の村寺から南の亭（村の集会場）までの境界がある。華人商人は各氏族の土地と私有地を買い街をつくったが、信仰場所は清河の婆寺（天后宮）や爺寺（関帝廟）まで行き、幫会の活動をしたときはジン市場へ行った。褒栄華人商人の付随的性格は古来ベトナム村落の文化力を体現し、市場経済において特色を持った村落の一つの容貌を作り出し、封建時代の都市化における基盤移行への一歩となった

19世紀初頭から1885年までのフエのほかの商業地区と比較した場合、ジン市場、ザーホイ市場、ドンバー市場のように、フエの都が破壊される以前の褒栄における商業取引活動は、「より活況を呈し、より多くの家屋が存在し、より多くの富裕商人がいた（1876年の船長ドゥトレイル・ド・リン [Dutheil de Rhins] の認識）」という状況であったが、見事で立派な建築や景観が他の場所と比べて少なかった。なぜなら華人商人による廟や寺、会館の建設が少なかったからである。1876年にきた船長ド・リンは次のように報告する。「船が全くの注意を払わず清河の前を通り過ぎようするとき、明郷の中洲にさしかかると褒栄のにぎやかな風景に注意をむけられるが、それを <sup>マンカー</sup> Mang Cá（訳者注：フエ都城北端突出部）だと思ひこんでいる」。すなわち19世紀後半には清河は普通の村に変貌し、フエ王城の北東に位置する褒栄がにぎやかな町並みを呈すようになっていた。

褒栄の商業について書き残された資料は少ないが、1916年 R.モリノ（R. Morineau）の「バオヴィンーフエの商業港」という研究論文が我々に褒栄港町の次の3段階の風景を提示してくれる。1820年シェノー（Chaigneau）の回想録、1876年破壊される1885年以前の褒栄の全盛期を書いたドゥトレイル・ド・リンの手記、1916年破壊から30年後の回復した褒栄についての R.モリノの感想<sup>23)</sup> である。

1820年、シェノーは次のとおり褒栄街について書いている。「ここでは中国人も安南人も高価な産物の大量取引をおこなう。ここの人々はフエの周辺地域と比べて裕福である。ここを通り過ぎるなら、彼らの裕福ぶりがすぐにみてとれる。彼らはそんなに騒がしくないが、とても勤勉で一生懸命に働く。中国人は中国製品を大量にそろえた商店を多くもっている」<sup>24)</sup>。

23) Morineau, J., Bao Vinh, port commercial de Hue, *BAVH* 3-2, 1916, pp 200-210. 引用は翻訳版 Bao Vinh - thương cảng Huế, *BAVH* Bản dịch, NXB Thuận Hoá, 1997, 208-219頁.

24) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 209頁.



この時代の褒栄の輸出入品は次のように記されている。「船がフェの湾口に入り、褒栄まで約12km 廻る。バオヴィンには商店や倉庫がある。さらに遠くに行くことを許可しない。船は布、絹、磁器、茶、漢方薬、果物、ジャム、菓子、玩具を運んでくる。帰る時は、ビンロウ樹、粗絹、染色木、北部の綿油、犀皮、象牙、象牙などの安南特産品を大量に運ぶ」<sup>25)</sup>。

1876年デュトレイル・ド・リンが褒栄の港と品物を次のように描写している。「ここはフェ城都から連なっている陸地に位置する港である。安南と中国の多数の船が幅の狭く底の深い川（川幅は150m、深さ8m）の上にひしめきあっている。これらの船に対する評価は外観から判断すべきでなく、そのなかの商品価値から判断すべきだ。何枚も敷かれたゴザの下や船体の蓋の下には、安いものからいえば、膨張菓子、胡椒、象牙、砂糖、ニッキ、カルダモン、チャムの砂仁（ショウガ科の植物）、煙草、茶、密輸麻薬、布、磁器、象牙細工、銀工芸品、黒銅工芸品、武器、細工付き木製机椅子セットがある」<sup>26)</sup>。

1885年のフェ城破壊（訳者注：フランスによるフェ占領）で褒栄の商業区は荒れ果て邸宅が崩壊した。これをモリノは次のように書いている。「褒栄の目立つ市場や中国人や安南人が所有するすべてのきれいな家や広々とした倉庫は、1885年以降は破壊でなくなってしまった。いいかえれば、この時期に褒栄の大半は破壊された。“大臣の祥”とよばれた輔政大臣阮文祥（Nguyễn Văn Tường）の家は、清潔で秀麗な花壇があったが、今では崩れ落ちた壁や荒れ果てた庭の跡、ありふれた数軒の家が残っているだけである」<sup>27)</sup>。

1885年の破壊後、発展したドンバー市場が長い時間をかけて1899年新しい場所へ移ったが、褒栄港町の商業活動は依然として活発だったことを、1916年にはR. モリノが、次のように描写している。「褒栄はもはや以前のような黄金時代ではないが、重要な市場であり、この地域では、フェの市場に次いで美しい。買い物をする人が、街のなかのきらびやかな店でほられたくないのなら、褒栄にいけば国内、中国、日本、インド、そしてヨーロッパの各製品が簡単に見つけられる。また、フェのきらびやかなお店では売られていない日常用品もみつけられる」<sup>28)</sup>。

またモリノは褒栄港の様子を次のように書いている。「船主はナムディン（Nam Định）、ファンリー（Phan Rí）、クイニョン（Quy Nhon）、ダナン出身であり、船員も北部か中部出身である、完全な安南型の各種船舶が見られるし、それらの船は次のような各産品を運んでくる。ナムディンの絹、ベトナム北部の彫刻入り木製机椅子セット、ファッジエム（Phát Diêm）のゴザ、タインホアの桂皮（シナモン）、ベトナム北部あるいは中国や日本から輸入された製品である。ファンリー、クイニョン、ダナンからは塩、各種陶器、各種製品を、米、ピーナツ、ゴマ、椰子の実、椰子縄、胡椒、煙草と交換売買するために運んでくる。

25) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 209頁。

26) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 210頁。最盛期を迎えていたバオヴィンの市場は、1885年の事変後、多くの商店や大倉庫が破壊されてなくなり、崩れ落ちた壁や荒れた庭になった輔政大臣であった阮文祥（Nguyễn Văn Tường）の家やいくつかの民家だけが残された…。

27) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 210頁。

28) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 212頁。

褒栄から出港してハイフォン（Hải Phòng）港やダナン港を経由し中国や香港に向かう船はどれも物品を満載している。最も多い積載品は、米、とうもろこし、キャッサバ、芋、あるいは籐、竹、槍柄、舟板、沈香から作られる林産品、さらには、フエの裕福な家庭の庭にてきたビンロウ樹、ザボン、オレンジ、みかんなどの各種果物や最近では龍壽（Long Thọ）石灰工場の製品などフエ上地方の産物も含み、そうした物産は安南人や中国人の手によってフエへ集荷されている<sup>29)</sup>。

褒栄の繁栄は主に河川港にもとづいていた。しかしR.モリノが描写した時代には、フエには鉄道が出現し、褒栄から約2km下流の頼恩（Lại Ân）には通行する大型商船を検査する検問所ができたし、チュオンティエン（Trườn Tiền）橋の隣に新しいドンバー市場が賑わいをみせていた。けれどもモリノは次の考えを書き残している。「依然として褒栄はフエの商業店にとって水路によって運ばれた商品を置いておく倉庫であり、輸出入のための市場であり、それ以上に旅行者が注意するに値する一風変わった楽しいセンターであった」<sup>30)</sup>。

彼は次の文章で自分の研究を結論づけている。「褒栄を完全になくすべきではない。なぜならなくしてしまえば古都フエの美しい地域を失うことになるからだ」<sup>31)</sup>。褒栄には華人商人だけでなくベトナム人商人も市場の主になって名をはせていた。彼らはお互い出身地が異なっていたが褒栄に来た目的は商売の成功だけであった。モリノが言及した一世紀近く前の商売人たちは今でも褒栄の人々に語り継がれている。ボクエ（Bộ Quê）、バーロット（Bá Rốt）、クワンルオン（Quán Lương）、クワンホイ（Quán Hội）、フーホアン（Phủ Hoàng）、コアゼム（Khoá Dem）といった人々である。その多くが経営家であっただけでなく、多くの家屋、耕地、妻妾をもっていた。代表的なのがバーロット（Bá Rốt）であり、彼は褒栄にたくさんの家屋を所有し、羅渚（La Chử）村に47畝（訳者注：中部の一畝は4970㎡に相当、47畝は23万3590㎡にあたる）の農地を買った<sup>32)</sup>。

ダンジョン（ベトナム中部）は沿岸地域に多くの港が出現し、広がってゆく国の多くの建設潜在能力を約束した。阮氏広南国の歴代の王は、外国指向の経済思考をもち、また商品経済発展傾向やヨーロッパ諸国に作用される市場、アジアの商業圏にあわせるための新しい政治思考も形成した。清河港町はそうした歴史背景や、ダンゴアイ（ベトナム北部）の鄭氏との激しい競争の前に立った広南阮氏経済刷新政策に沿って誕生した。金龍-富春（フエ）の「都」の部分に対比される清河の「市」の部分は17-18世紀に発展した。それはフエ確立時期におけるフエの都市面の完成をもたらしただけでなく、広南国阮氏時代の経済、政治、対外関係の発展における重要な役割を占めた。

西山朝期の清河港町は環境変化のため、もはや船が接岸する理想的な場所でなくなり、それ以降徐々に衰えた。しかしながらフエの「市」は新しい港町の誕生によりそこに受け継がれた。その代表格が褒栄である。褒栄は19世紀阮朝のフエ畿内の物流中継の役割を果たしてにぎわった。

29) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 214-215頁。

30) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 208頁。

31) J. Morineau 前掲：引用は翻訳版 219頁。

32) バオヴィン在住の Phan Gia Đức 氏（当時55才）からのインタビュー（Trần Thiên Bình *Phố chợ Bao Vinh, Quá trình thành lập và hoạt động kinh tế - xã hội dưới thời Nguyễn* (1802-1945). 1998年度フエ科学大学歴史学部卒業論文引用資料）。

今日タインハー（清河）へ行っても当時の商業センターの面影はもはやなく、<sup>ミンタイン</sup>Minh Thanh という名の農業村（ミンフオンとタインハーの二つの村が合体して1962年に誕生した）があるのみである。ここには婆寺（天后宮）と爺寺（関帝廟）という二つの信仰施設があるのみである。バオヴィン（褒栄）には比較的原形を保つ三軒の家がかろうじて残っているが、修復する必要がある。それらは、フェの都市の様相を作り上げ、1636-1945年までの3世紀にわたり国の商業経済基盤となったところであり、巨大な歴史遺産から残されている映像なのである。